



Title	阪大オリジナルの源流-10年ひとむかし
Author(s)	長谷田, 泰一郎
Citation	大阪大学低温センターだより. 1997, 100, p. 2-3
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/8301">https://hdl.handle.net/11094/8301</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 阪大オリジナルの源流—10年ひとむかし

長谷田 泰一郎

この10月には第100号になるから何か書きませんかとお誘いを戴いて、この25年の越し方往く末を想い返していたのですが、フトこの間 Kamerlingh Onnes\* が Leiden 大学で低温の研究をスタートした時に創刊した Communications from the Laboratory of Physics at the University of Leiden 一少し古い先生方は Leiden Comm. という名でよく御存知だった低温の源流誌——の創刊号の、そこにあるにちがいない K.O. の序文をみてみようと思いついたことから始まったお話です。

残念ながら創刊の adress は見つからなかったのですが、先ずは 1885 年の No. 1 に Dr. J. P. Kuenen という名前をみつけて 10 年の既知にめぐり合った思いでした。この Kuenen は 1908 年 7 月 8 日の Leiden における He 液化成功当日のすべてが記載されている Leiden Comm. の No. 108 号 (1908 年) の中に liq. He が貯っているガラス容器の壁にメニスカスが見えない (垂直に接している) のに気がついたことが記されていて、その名前を私が知った当人なのです。彼の No. 1 号の中での報文は liq. CO<sub>2</sub> の表面張力に関するもので、ズシリと重い歴史の流れを感じさせられたことでした。

そしてもう一つ。この Leiden Comm. の No. 108 をくわしく紹介した Oxford の K. Mendelssohn が “The Quest for Absolute Zero” (McGraw Hill 1966\*\*) のなかで K.O. はこの Comm. を exclusively に Leiden 大学での低温の研究に devote した。そして、そのことが Leiden をまさに低温のメッカに育て上げたと述べているのです。気をつけてページをめくっていくと、Leiden 大学で仕事をしている P. Zeeman や de Vries 等の名前は何度も出てくるが Amsterdam 大学のかの van der Waals の寄稿はみつからない。どうやら、Mendelssohn の指摘は、彼の独断と偏見だけではないらしいのである。

我々がこの 25 年の間、阪大オリジナルと称して意地をはって来たことには、(1) 寄稿はジュニアからシニアまですべての研究者、それにテクニシャン、オペレータは勿論、事務関係の人々など、どなたにもお願いしよう、しかし、すべて exclusive に阪大の人達に限ろう とにかく身内のサーキュラーだという事を貫くこと、そして、(2) 話題も出来るだけ身内からのものに限ろう とつとめてきた事があげられると思います。

あまりにも融通無碍情報過多の近年すこしばかりの意地をはって独自のものを育てようという姿勢とあった積りでした。

よく阪大オリジナルの議論がありますが、どんなに幼稚でも、時には間違っていてさえも良いから、阪大の中で我々が思いついたこと、やってみたことをここに残しておこう、ということが繰返し述べられている。先日、よそには書けない詳細な技術ノートを充実しようという提案がありました。大賛成です。(3) 何から何まで書きつくすサーキュラーといった構想もよいのではないか。

ところで、私が阪大を定年になった 1985 年 4 月に No. 50 号になったので記念号を出したのですが、その編集をした 1984 年秋には、これからの 50 年の間に超伝導の T<sub>c</sub> はどこまで上るか、などノンキな調子で予想を募集したりしていたのです。ナント！次の年には high T<sub>c</sub> の嵐が吹きあれたのでした。たし

かに我々は気づこうが気づくまいが歴史の中に生きているんだなと実感すること切なものがあります。

No. 50号では、当時院生だった人も加えて若い人々と35人程で、低温の夢を語り合ったのですが、今、10年ひとむかし経って読み直してみると、おどろいたことに high  $T_c$  の出現を予想した人が35人の中に数人はいたのです。勿論、何の根拠もなくだったのですが——ヒョッとするとシニヤや人々には御遠慮願って、若い人だけで夢を追ったからかも知れない。

これから先のこの低温だよりの毎号の中にズシリと重い記録がつぎつぎに刻まれていくことを祈って筆をおくことにします。

\*現在K.O.研究所の Prof. G. Frossatiによれば、カタカナで書けばカメルリン・オンネスが一番近だろうとのこと。GH is in fact mute in his name.

\*\*絶対零度への挑戦 K.メンデルスゾーン（大島恵一訳）ブルーバックスがあります。四つむかしの古い本ですが名著です。

## 著者略歴

長谷田泰一郎

大阪大学基礎工学部教授、昭和60年停年退官。大阪大学名誉教授。

本学在職中、昭和48年に本誌「低温センターだより」を刊行、以後退官まで本誌編集委員長。低温センター運営委員、運営委員長を歴任。